

# 毎週のスケッチ活動を通して

奥 美奈子

## I はじめに

本校では、数年前からスケッチの課題に取り組んでいる。スケッチは、写生や空想画の下絵として、あるいは、デザインや工芸作品などのアイデアをメモするアイデアスケッチとして、美術の授業の中では基礎的なことであり欠かせないものである。今回の新指導要領の改訂でも、「すべての表現活動の技能的基礎であり、誰でも楽しめるスケッチをする。」ことが取り上げられている。この「誰でも楽しめる」というところが大切である。楽しむためには、自分なりにかいたものが、他人に認められ、自分で納得がいくくらいの自信が持てなければならない。

人間の発達段階では、自分の思ったことや知ったことを、思うがままにかいて楽しむ時期があり、成長するに従って、見たものに似せてかこうとし、もっと正確にかきたいという欲求が生まれてくる。そして、他人がどのように自分の絵を見ているのかが気になってくるのもこの時期であり、自分でも、自然に見えないとか、どうもおかしい、形がゆがんでいると気づくのもこの頃である。ここで、「自分は、絵が思うようにはかけないから嫌だ。」となるか、「なんとか見たようにはかけるし、楽しいから好きだよ。」となるか、二通りに分かれてくると思われる。そこで、前者のようにならないためには、自分なりにかくことができ、自信が持てることが大切である。そのためには、繰り返しものをよく見てかき、自分なりにかける自信がつくまで練習する必要がある。基礎練習を繰り返し、自信がついてやっとなんか楽しみながら絵をかくことができるのではないかと思われる。

本校でも、「絵をかくのが苦手だ。」「うまくかけなくて嫌だ。」という生徒が少なからずいる。そういう生徒たちが一人でも少なくなるように、そして、上手下手ではなく少しでも絵をかくことに慣れて、おっくうでなくなるように、自分なりに楽しみながらかけるようにという願いを込めて、毎週のスケッチ活動に取り組んでいる。

## II 実践のねらい

前項でも述べたように、毎週のスケッチ活動を通して、生徒たち一人ひとりが少しでも絵をかくことに慣れて自信を持ち、楽しみながらかけるようになれば、という願いを込めてこの活動に取り組んでいる。そして、「絵がかけるようになってきた。」という自信をきっかけに、少しでも美術に対する興味や関心を持たせてやりたいと考えている。

## III 取り組みの実際と考察

### 1. 対象と方法

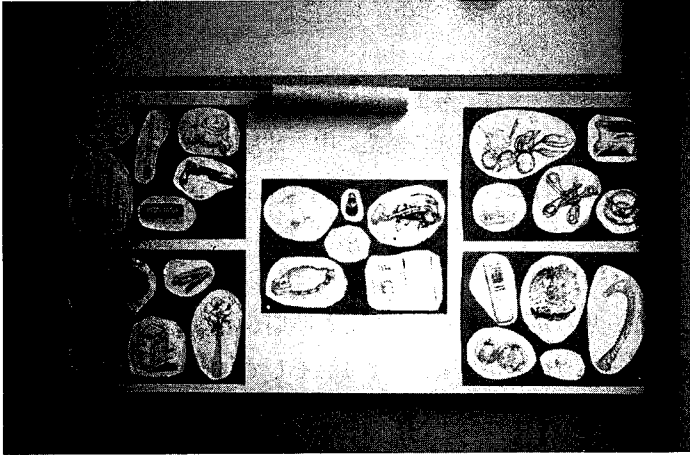
- (1) 対象……1年生 160名、2年生 157名、3年生 152名 計 469名
- (2) 方法……次の美術の時間までに、何か1つ題材（モチーフ）を見つけてスケッチをし、美術の時間にスケッチブックを提出する。教師は、提出されたスケッチブックに目を通し、毎回5段階にチェックし、励ましのコメントや簡単な指導を記入し、早めに返却する。

### 2. 生徒たちの反応

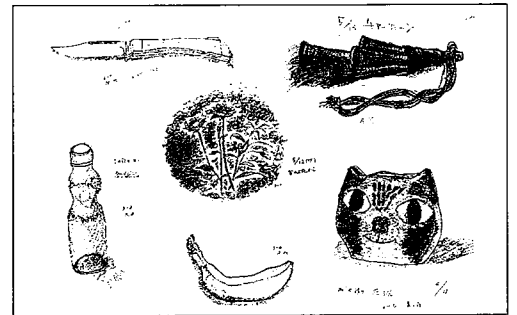
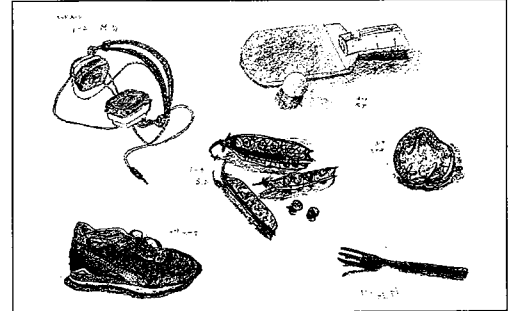
スケッチの課題に取り組み始めた当初は、毎回ほぼ全員のスケッチブックが提出されていたが、次第にその数が減ってきたり、学年が上がるに従って提出状況が悪くなってきたりした。また、かくモチーフがワンパターン化されたり、雑になったりしてきた。生徒たちも、毎回の課題に少し疲れたり、モチーフを探すことに疲れてきたようである。そ

こで時々、「今週のテーマ：台所にあるもの」「今週のテーマ：玄関にあるもの」というような形で、モチーフ探しのヒントを与えてみたりした。また、提出されたスケッチの中から、よく見てかいているものやユニークなモチーフのもの、生き生きとした線がかかっているもの、明暗のつけ方が参考になりそうなもの、その子なりによくかいているものなどを、できるだけいろいろな作品で、いろいろな生徒のものをコピーして掲示してみた。

コピー掲示 ①



コピー掲示 ② ③



2週間から1ヶ月に1回位の割合で新しいスケッチのコピーを掲示するのだが、新しいものばかり出されてしばらくは、掲示板の前に人だかりがする。「これうまいねえ。」「誰のかなあ。」「あっ、私のが出てる。」「おもしろいものがかいてあるねえ。」「みんながどんなものをかいているのか参考になる。」など、生徒への反響は大きい。時には、「この前はってあった花のコピー、良かったらもらえませんか?」と言って来る生徒もいた。ともあれ、生徒たちのスケッチをコピーして掲示することは、少なからず生徒たちに刺激を与えたようである。

毎週提出されるスケッチを単なる課題で終わらせず、何とかみんなに発表し鑑賞してもらう場はないものかと考え、思いついたコピー掲示であるが、残念なことにコピーすると、鉛筆の微妙な線や濃淡などが失われがちになる。やはり、コピーはコピーでしかなく、本物に勝るものはない。生徒たち直筆のスケッチの良い所を見せてやりたいと思う。何か良い方法はないだろうかと現在思案中である。

### 3. 生徒たちの実態

ところで、生徒たちは、この毎週の課題となっているスケッチについて、どのように受けとめているのだろうか。右のようなアンケート調査を行い、生徒たちの実態を調べてみた。

美術：毎週のスケッチについて

生徒番号 ( )

① スケッチは、毎週していますか。

1	2	3	4	5
全く ない		時々		毎日

② スケッチをしてきて、自分なりに、うまく、なと思いますか。

1	2	3	4	5
全く ない		時々		毎日

③ スケッチをしてきて、描くことに慣れてきたと思いますか。

1	2	3	4	5
全く ない		時々		毎日

④ スケッチをする時、気を付けている事は何ですか。

⑤ スケッチをコピーして掲示される事について、どう思いますか。

⑥ スケッチをしただけから、気がついた事、困った事はありますか。

※できるだけ、理由を添えて、具体的に書いて下さい。  
okk(ありがとうございませ)

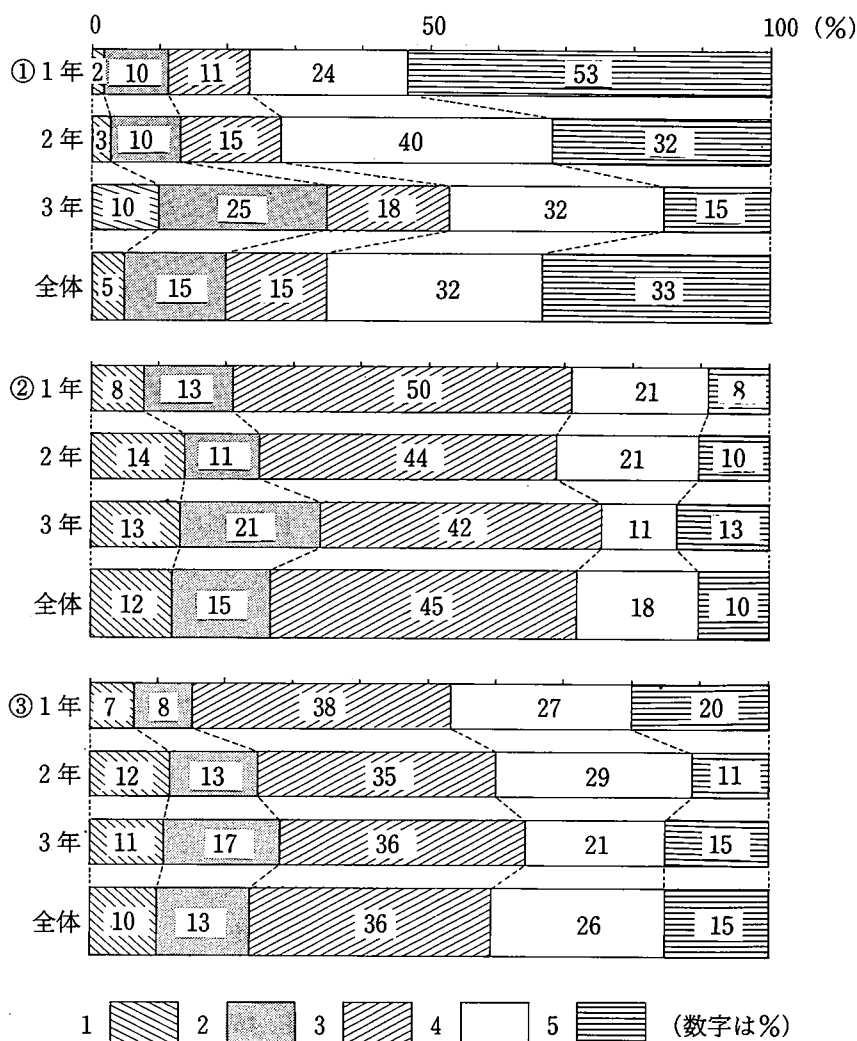
毎週のスケッチ活動を通して

○アンケート結果

項目	学年	1年	2年	3年	計
①	1	4	4	15	23
	2	15	16	38	69
	3	17	24	27	68
	4	36	62	49	147
	5	79	49	23	151
②	1	12	21	20	53
	2	20	18	32	70
	3	75	68	63	206
	4	32	33	17	82
	5	12	15	20	47
③	1	10	18	17	45
	2	12	20	26	58
	3	58	55	54	167
	4	41	45	32	118
	5	30	17	23	70

(数字は実数)

調査人数	1年生	151人
	2年生	155人
	3年生	152人
	合計	458人



(1) アンケートの結果から

- ①～ 半数以上の生徒が、スケッチに取り組み、スケッチブックの提出を重ねているが、全体の5%も全くしていないと答えている生徒がいるのも見逃せない。また、学年が上がるにつれて、取り組み状況が悪くなってきている。
- ②～ スケッチを繰り返すことで、「自分なりにうまくなった」「まあまあうまくなったと思う」生徒がほぼ7割で、スケッチをしてきた成果がうかがえる。
- ③～ 「かくことに慣れてきた」「まあまあ慣れてきた」生徒がほぼ8割で、かくことへの苦手意識をもつ生徒が少なくなったようである。しかし①との関連からか、学年が上がるにつれて、「かくことに慣れてきた」とする生徒が、少しずつ減ってきている。
- ④～ スケッチをする時に気をつけていることは、「かげや明暗をつける」が最も多く、全体の半数以上を占めていた。次いで「そのものらしさを出す」「立体感を出す」「丁寧にかく」「バランスや形をよく見てかく」などがあげられた。中に少数ではあるが、「前の注意を忘れない」とか「心をこめてかく」という回答もあり、ふと心暖まるものがあった。生徒たちは、自分なりにいろいろ考えてスケッチに取り組んでいることがわかった。
- ⑤～ スケッチをコピーして掲示されることについては、「友達の良い所がわかっていい」「うまい人を見て感心する」「勉強になる、参考になる」という回答が圧倒的であった。また、「目標にすることができる」「自

分のがでたらうれしい」「掲示されるようがんばりたい」「やる気がわく」「自分のもだしてほしい」という回答も多く、コピーして掲示されることを、ひとつの励みにしている生徒たちもいることがわかった。反面、「イニシャルを入れないでほしい」「恥ずかしい」「プレッシャーを感じる」という回答もあった。また、掲示されたコピーを参考にモチーフ探しをする生徒もいるようである。

⑥～ スケッチをして気がついたことや困ったことでは、「スケッチするものがなくなる」「モチーフを探すのに困る」という回答が多く、スケッチブックの提出が少なくなってくる原因のひとつと考えられる。また、「かげのつけ方が難しい、わからない」「うまくかけない」とか「かげのつけ方がわかってきた」という回答があり、④の回答と呼応して、明暗やかげのつけ方を気にかけながらスケッチしている生徒が多くいることがわかった。他に、「かげとものの色との区別を鉛筆でどう表現したら良いか」とか「消しゴムの使い方を工夫すると、上手にかけることに気がついた」「形がよく見えるようになっておもしろい」「生き物は難しい」「ガラスや水は難しい」「継続は力なり」「初めよりうまくなった」など、生徒たちは、自分なりに様々な発見をし、問題意識をもちながらスケッチに取り組んでいることがわかった。またスケッチブックが大きすぎると持ち運びがしにくく、荷物の多い生徒たちにとって、特に電車や自転車通学の生徒たちにとっては、持ち帰りにくいようである。これから、鞆に入って手軽に持ち歩けるスケッチブックの大きさというのも考えてやる必要があるかもしれない。

(2) モチーフの選択

以上、アンケート調査の結果をまとめてみたが、その中に、「モチーフを探すのに困る」ということが出てきた。そこで、生徒たちはどんなものをスケッチのモチーフとして選んでいるのか調べてみた。各学年とも、最も多かったものから上位5番めまでをあげておく。

1年生	2年生	3年生
1. 文房具	1. 文房具	1. 文房具
2. 小物、置物	2. 小物、置物	2. 人物、手
3. 花、植物	3. 花、植物	3. 花、植物
4. 食器など台所にある物	4. 果物、野菜、菓子等の食べ物	4. 小物、置物
5. 果物、野菜、菓子等の食べ物	5. 机の上や中のもの	5. 果物、野菜、菓子等の食べ物

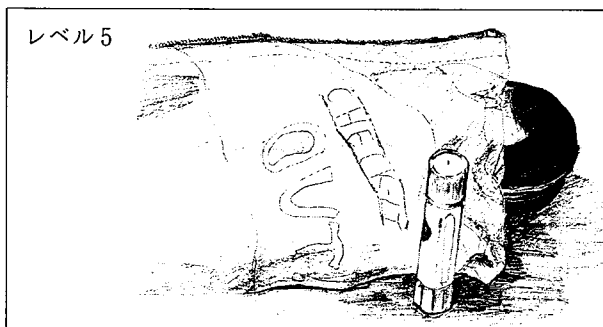
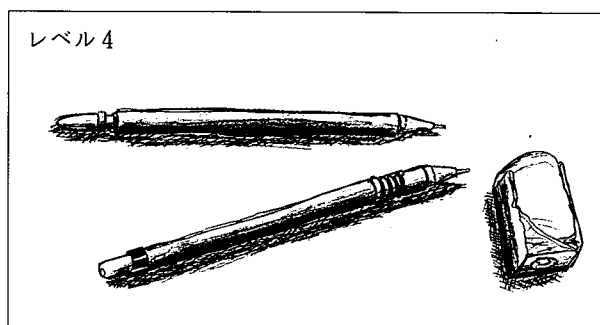
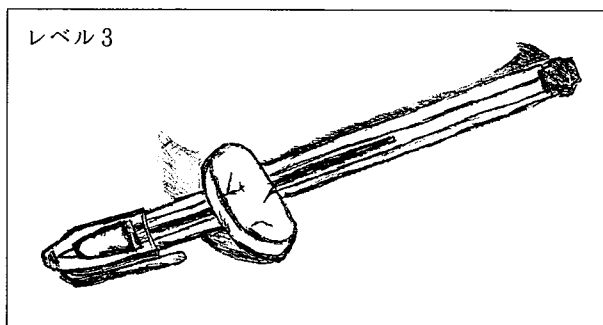
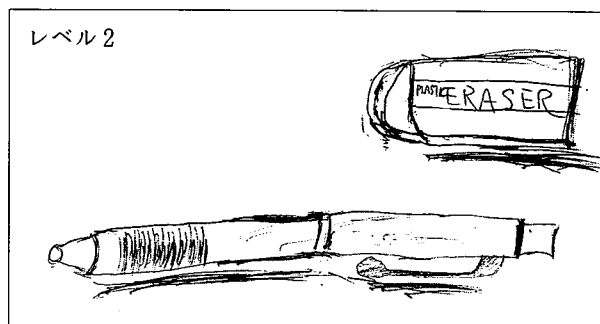
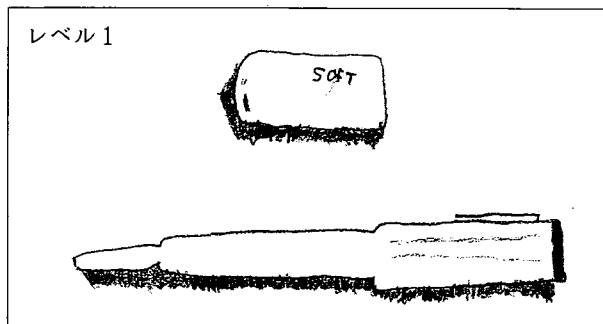
どの学年でも、「自分の部屋や身のまわりにあるもの」「自分がよく使うもの」をモチーフとして選んでいる。中には、少数ではあるが、「今までにかいたことがないもの」「人がかきそうにないもの」とか「形のおもしろいもの」「形がごちゃごちゃして難しいもの」「左右対称でないもの」とか「大切なもの」「思い出のあるもの」というように、奇をてらったり、モチーフの形に注目したり、自分の思い入れからモチーフを探したりしている生徒もいる。

(3) スケッチの能力

レベル	・スケッチの能力についての一応のめやす
1	ごく単純な直線的形体のものを見て、だいたいそれらしく表せる。
2	直線的形体や簡単な曲線的形体のものを見て、だいたいそれらしく表せる。
3	見たものや考えたことの大まかな特徴をとらえてそれらしく表せる。
4	見たものや考えたことの特徴や陰影、立体感、全体の感じなどをとらえて的確に表せる。
5	見たものや考えたことを、質感や雰囲気をとらえて表したり、ものとの関係をとらえ、創造的に表せる。

毎週のスケッチ活動を通して

スケッチの能力について、一応のめやすを前頁のように設け、実際に生徒たちのスケッチをレベル別に分けてみた。対象としたのは、2年生150名（欠席7名）であるが、他の学年でもほぼ同じような傾向が見られる。



レベル	1	2	3	4	5
人	1	13	77	45	15
%	1	9	51	29	10

(全体……2年生150人)

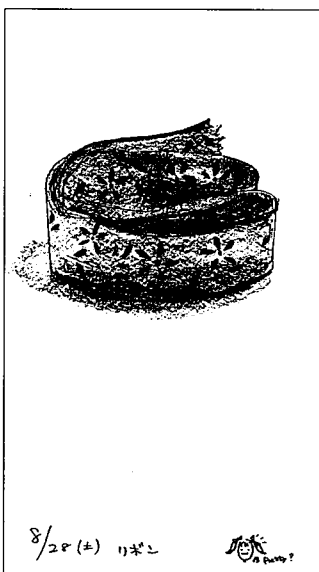
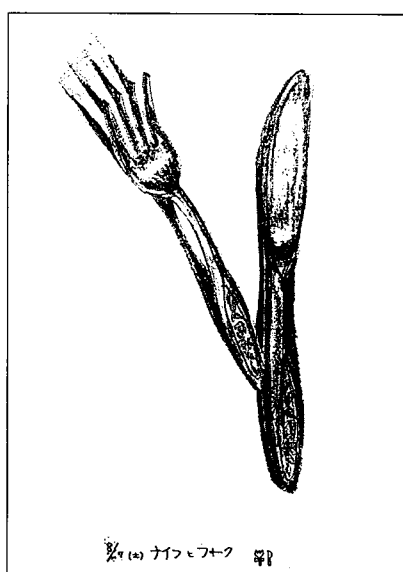
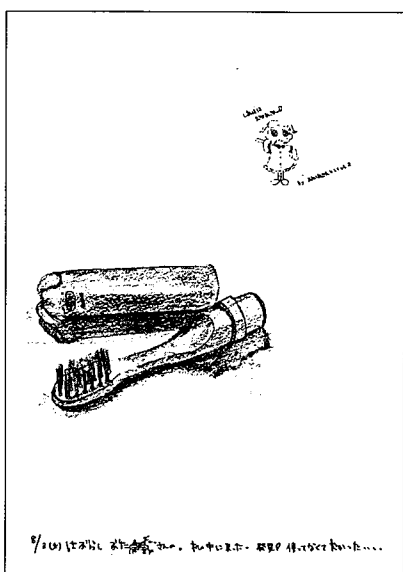
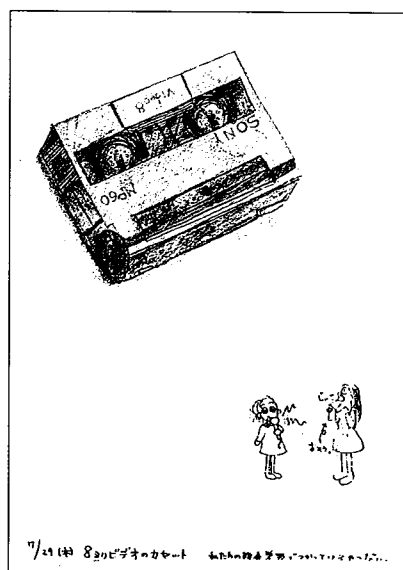
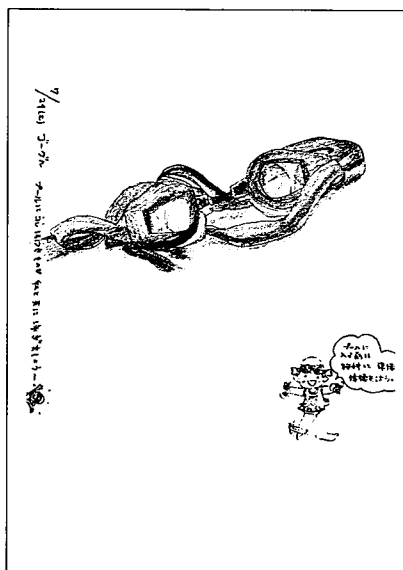
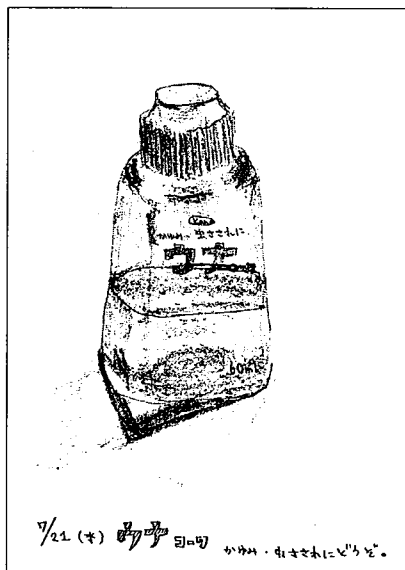
一応上記のように5段階に分けてみたが、レベル3からレベル4へ、レベル4からレベル5へ移行できそうな生徒は何人も見うけられる。毎週のスケッチの評価では、このような5段階評価はとっていない。まず、提出されないもの、完全にふざげきってかいているものは評価の対象としない。提出されたスケッチを、「まあまあですね」「よくできました」「まいった完璧です」の判子で3段階に評価している。もちろん、コメントもつけ加える。普段は、相対的な評価ではなく、生徒たちを励ます意味で絶対的な評価にしている。他の生徒と比べれば形がうまくとれていなくても、その生徒なりにがんばってものを見てかいていれば「よくできました」であるし、日頃他の生徒よりうまくかいていても、その生徒にしては手を抜いてかいている時は「まあまあですね」であり、それより下の「もう少しがんばれ」の判子を押し時もある。生徒たちの中には、この判子が定着していて、「全段階の判子を押してもらおう」とか「次は『まいった完璧です』がもらえるようにがんばろう」「今日のスケッチは『まいった完璧』だぞ」というふうに、ひとつの励みや楽しみにしている生徒もいる。また、前学年の時にはあまり目にとまらなかったが、スケッチを続けて提出しているうちに、「この生徒はこんなにかけたかな?」「この生徒はうまくなったな」と感じる生徒たちが、出てくるようになってきた。

(4) 興味・関心

生徒たちにとって、初めは単なる学習の課題であったスケッチであるが、毎週続けてきたり友達のスケッチを見



スケッチ③ 3-3 M. I



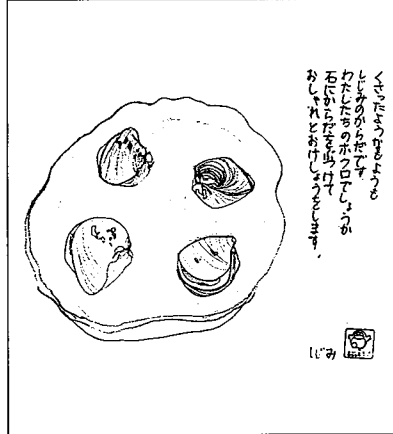
感想  
 最後の仕上げになっていった。  
 夏休みしかかけないよな  
 キツカをかけたかった。  
 でも特にそりいりの  
 なかった。...  
 3日まで"かけて"上がった。

スケッチ④

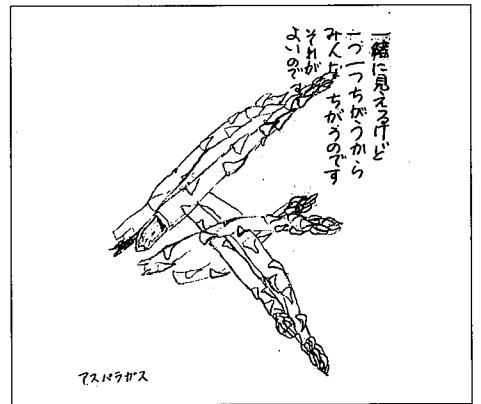
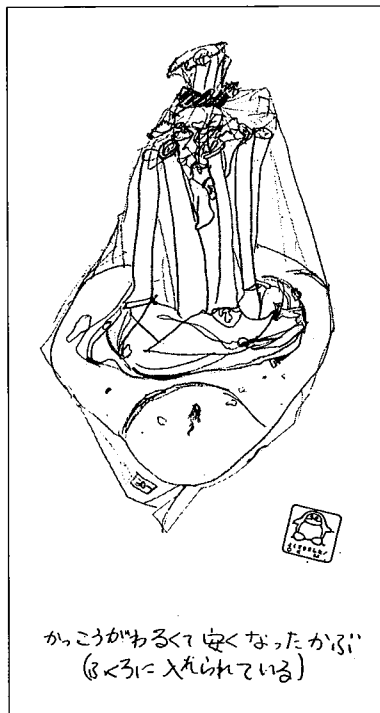
この生徒は、1年生の夏休みに星野富弘氏の作品に出会い感動し、それ以後、自分のスケッチに短い言葉や文章を載せ、モチーフからうける感じを表現するようになった。また、選ぶモチーフも花や野菜などの植物が多い。スケッチに陰影をつけることを好まず、いきいきとした線描だけで表現することが多い。

スケッチ④ 3-3 Y. S

1年作品



1年夏休み



3年作品

2年作品

この他にも、手だけをモチーフにする生徒や手に何かを持っている所だけをかく生徒、いろいろ種類をかえながら花だけモチーフにする生徒など、モチーフ選びに凝っている生徒もいる。

このようにいろいろな方向で、かくことに少しずつ興味や関心を持ち、自信をつけてきた生徒たちが出てきたことは、うれしいかぎりである。



#### 4. 生徒たちの感想から

生徒たちが、これまでにスケッチをしてきてどのような感想をもっているのか、学年ごとにいくつかあげておく。

##### 1年生

- 週に1回スケッチするクセみたいなのがついたので、スケッチをしない時にも「これをかくと面白そうだな」とか思うようになった。
- 気分転換にスケッチをするのはすごく楽しい、面白いです。それに、自分なりにうまくかけた時の満足感がすごくいい。
- かけのつけ方も最初に比べて技術も高くなったし、自分の線でかき表すことができるのが、不思議で面白い。
- たまにすごく面倒臭いと思う時があるけど、かき終えた時その作品がうまく仕上がった時はとてもうれしい。

しい。

- スケッチをするようになって、あまりまじまじと見てなかった物の意外なところが見つけられたと思う。
- 細々した物でも小さい物でも、それなりにかけや形をもっているのが楽しいです。
- いろいろな物をかくと、これまでに気づかなかったことが見えてきて良いと思った。
- 私は絵が苦手なので、スケッチをすることがあまり好きではない。スケッチするのに時間がかかりすぎてしまう。だからちょっと嫌って感じがする。でも最近、ほんの少しくまくなった気がしないでもない。
- 1回だけ掲示されたけれど、もっと上手になりたい。

##### 2年生

- スケッチをしてきて、小学校の頃ものすごく絵が下手だった自分が少々ましな絵をかけるようになった。
- 最初はとても不安だったのですが、2年間続けたおかげでそれなりのコツもわかったし、気軽にスケッチできるようになったので、とても良かったと思っています。
- 絵はうまくなったと思うが、スケッチの技術はあまり身につけてないと思う。もっと技術を教えて。
- 絶対うまくなったと思う。絵をかくことにあまり興味がなかったけど、楽しくなってきた。
- いつも小さくしかかけなかったので、1ページを使っていた時は気持ちよかった。色もつけてみたい。

- 自分なりにかけのつけ方等を工夫するようになって、最初の方よりよくなったりして、楽しくかけた。
- かけのつけ方とか、初めは何も知らなくて適当にぬりつぶしていたけど、授業で習った事を応用して斜線を重ねてかけをつくったりしているうちに、だんだん本物らしくなって行って少しくれしかった。
- 1週間に1度は絵をかく機会があって、自然に物をかく事に慣れてきた。美術の時間に提出という事がなかったら、普段は全くかく機会がなくて作品もうまくできないと思う。
- 物のかけのつけ方や、物を立体的にだんだんかけるようになってきました。

##### 3年生

- 1年の時のスケッチブックを見ると、美術がまだ好きではなかった頃の雑で下手なスケッチがあります。2、3年ではスケッチをするのが結構楽しみになって少しくまくなったと思います。
- 初めよりうまくなったと自分は思う。「まいった完璧」をもらうのが夢だったけど、2回ももらえてとても満足である。
- 3年間スケッチをしていると、題材がなくなっても困ってしまう。でもモチーフを探すのも結構楽しい。絵をかくのも好きになれた。

- そろそろ題材がついてきた。いつも1時間以上かけるので集中力がついた。
- うまくなると面白くなってきますね。
- 試験前とか少し時間があるとスケッチをしました。ちょっとした息抜きにもなって、とても楽しくスケッチできました。
- スケッチをする事によって、私が1番苦手としていた「物を見てかく」というのが少し得意になったのでうれしいです。
- やっていたら、1年の時より結構うまくなったと思う。少し驚いた。

この他に、モチーフ探しに困っているという感想が多かった。特に学年が上がるにつれて身のものはかきつくしてしまい、何をかくか見つけるのに時間がかかるようである。また、かき慣れてきた生徒はそうでもないが、かくのに時間をかける生徒にとっては、試験前の課題はきついようである。毎週の課題だと面倒臭くなったり、かくのがだんだん雑になってくると感じる生徒も多いようである。

#### IV ま と め

毎週のスケッチの課題を続けてきて、絵をかくことに少しずつ慣れ、自分なりにうまくなってきていると感じている生徒が増えてきたように思われる。また学年を追うごとに、確実にかく力が身についてきたなと思える生徒が何人も見うけられる。これは彼等の努力の成果であり、確かに彼等の自信となっているはずである。自分の中で少しずつでも自信がついてくればスケッチすることへの関心がわき、かく楽しみが味わえるようになってくる。そして、ひいてはそれが絵をかくことや美術全体に対する興味や関心につながってくるのではないだろうか。私自身、そう願いながらスケッチを通しての生徒たちとの対話を繰り返し、少しずつの成果を楽しみにしながら毎週のスケッチを続けているところである。しかし、成果を上げている生徒たちばかりではなく、毎週のスケッチを続けて行くためには様々な問題点も抱えている。

生徒たちのアンケートや感想から、次のような問題点があげられる。○スケッチの回数は毎週でいいのか。回数が多くはないか。○モチーフ探しに手間取る生徒への配慮はどうしたらいいか。○スケッチに取り組まない生徒、スケッチブックを全く提出しない生徒へはどう対処すればいいか、など。これらの問題を考えながら、できるだけ生徒たちへの時間的、精神的負担を軽減する方向で検討し、スケッチの活動を続けて行きたいと考える。また、スケッチを課題として呈示するだけでなく、授業時間に取り入れ、全体での実技的な指導も加えながら取り組んで行く方法も考えたいと思っている。

今後、生徒たちがどれだけスケッチの楽しみを味わい、美術に興味、関心をもってくれるか未知数ではあるが、スケッチブックでの対話を通しながら、少しでも美術が好きになってくれるように願いながら、このスケッチの活動を続けて行きたいと考える。

#### 参 考 文 献

- 遠藤友麗（編著）（1991），『新学習指導要領の指導事例集 中学校美術科 1 絵画・彫刻』東京：明治図書。  
 文部省（1993），『中学校美術指導資料 美術科における学習指導と評価の工夫』大阪：日本文教出版社。  
 鳥居照美（1981），『子どもの人格形成と美術教育』東京：ささら書房。  
 西田雄行（1986），『学校現場における実証的な教育研究の進め方と論文の書き方』東京：東洋館出版社。  
 島根大学教育学部附属中学校（1993），『第35回中学校教育研究発表協議会要項』

（おく みなこ・美術科）